

フラナリー・オコナーの伝記を読む

渡 辺 佳 余 子

Flannery O'Connor (1925-1964) は、1925年3月25日、ジョージア州サバンナで父 Edward Francis O'Connor と母 Regina Cline O'Connor の一人娘として生まれ、Mary と名づけられた。1938年、一家は父の仕事（実業家。不動産会社や建設会社を設立、銀行事業を引き継ぐ）の関係でアトランタに引っ越す。さらに、同じ年の夏には、母親の実家があった Milledgeville に移った。母親のレジーナは、この町の旧家出身で、一家は母親の育ったクラインの館に住んだ。この館は、1820年に建てられ、この町がジョージア州の州都（1807-68年）であったとき、一時（1838-39年）、知事の邸宅として使われた。この館を、1886年に、母方の祖父である Peter Cline が手に入れ、以後オコナーも一家で住むようになった。

しかし、この館に移り住んで3年後の1941年には、父親が紅斑性狼瘡で亡くなる。オコナーが16歳、高校生のときであった。以後、オコナーは、母親との二人暮らしになる。オコナーの作品に繰り返し登場する、落ちぶれた南部貴族の末裔の中年婦人、一人で農場を経営し、雇用している貧農白人や黒人と確執を繰り返す中年婦人などは、オコナーの母親がモデルになっていることは良く指摘される。オコナーは、このような母親から自由になりたいと考えたからなのか、ミレッジヴィルにある大学を卒業後には、アイオワに行き、小説家の登竜門として有名なアイオワ大学の Creative Writing コースで修行する。ここに所属した当初から、オコナーは珠玉の小品と言える幾つかの短編を書いており、文学賞も受賞し、大作家になることが予測されるような活躍をした。¹⁾

オコナーの作家としての修行はさらに続き、1948年には、ニューヨークの Saratoga Springs にある芸術家村、Yaddo に滞在する。翌年には、生涯の友であり助言者であり、オコナーの死後には書簡集とエッセイ集を編纂した Robert & Sally Fitzgerald 夫妻と、知人の紹介を通じて出会う。彼らは、お互いに信頼を寄せ合い、オコナーは、その年の9月には、コネティカット州、Ridgefield に住むフィッツジェラルド家に下宿し、長編 *Wise Blood* (1952) の執筆に取組む。オコナーは夫婦の3番目の子供の名付け親になったりすることからも、彼らが家族のような暖かい関係にあったことがうかがえる。

しかし、オコナーは、1950年の12月、最初の紅斑性狼瘡の兆候に襲われてしまう。父の命を奪った病気である。アトランタの病院で診察された後、翌年の春には、彼女は、ミレッジヴィル郊外の Andalusia 農場に母親と伯父の Louis と移り住む。以後の4年間は、治療が続く。健康を回復することもあるが、入退院を繰り返す。発病して以来ずっと、病気との闘いは続くが、彼女は決して書くことをやめることはなかった。それ以上に、彼女は作家として有名になってからは、松葉杖をつきながらも大学などで講演を積極的に引き受けた。そして、1964年8月3日、2つの中篇と数多くの短編を残して、オコナーは39歳の若さで永眠した。

以上、オコナーの生涯を簡単に辿ってみたが、筆者も含むオコナー研究者たちは、彼女についての大部の伝記が書かれることを心待ちにしていた。²⁾ しかし、これまで2つの障害があって、オコナーの伝記が執筆されるのは困難であろうという見方があった。一つは、一人娘の生前の情報を

提供したがない、レジーナというオコナーの母親の存在である。もう一つは、母親を除けば一番近い存在であったはずのサリー・フィッツジェラルド（以後、サリーと記す）が、オコナーの伝記を書き始めてはいたものの、彼女が相当に遅筆であったことである。

筆者は、これまでにアメリカで開催された3つのオコナーについての大規模なイベントに参加する機会に恵まれた。1つめは、1994年の4月13日から16日までの4日間、オコナーの故郷ミレッジヴィルにある彼女の母校ジョージア・カレッジ（現在は Georgia College and State University）で行われた「フラナリー・オコナー没後30年祭」である。³⁾ この祝祭への国内外からの参加者は500名を超えた。研究者に加えて、アメリカ先住民の血を引く人気作家 Louise Erdrich や Joyce Carol Oates もゲスト・スピーカーとして招待され、筆者も著書にサインを求める長い列に並んで順番を待っていたときのことは、今も記憶に残る楽しい時間であった。このイベントで、“Flannery O'Connor Abroad” というパネルがあり、筆者は日本におけるオコナーの紹介を担当した。これは、*Flannery O'Connor Bulletin* の編集者であり、このイベントの開催委員長であった、ジョージア・カレッジの Sarah Gordon 教授が与えてくれた光栄なる機会であった。

筆者がパネルの発表者であったことから、ゴードン教授は、ジョージア・カレッジのフランス語の教授宅にホーム・スティさせてくれただけでなく、著名なオコナー学者が集まるさまざまな会合にも参加させてくれた。そのため、あるランチの会合で、筆者は幸運にもサリーとも話しをすることができ、持参したオコナーの書簡集 *The Habit of Being* (1980) にもサインをしていただいた。そのとき、サリーは、生前のオコナーの思い出話や、6人の子供の母親でもある自己の私的な生活の様子を語ってくれた。さらに、彼女は、オコナーの伝記を執筆中であるとも言っていた。

しかし、このイベントから6年後の2000年に、彼女は、伝記の執筆を終えることなく83歳で他界した。彼女が執筆途中であったオコナーの伝記については、“The fate of this work will be decided by her family and her publisher”⁴⁾ と、ジョージア州立大の名誉教授であり、オコナーの友人でもあった William A. Sessions が述べている。セッションズによれば、サリーが、オコナーの伝記をほぼ完成したと彼に伝えたということである。

1994年の「没後30年祭」には、研究者の他にオコナーの親戚や知人や友人が参加していた。その人たちによればオコナーの母、レジーナ（当時98歳）は、高齢のための気難しさもあって、彼女の娘についての貴重な資料を、Flannery O'Connor Memorial Room（1974年設立）があるジョージア・カレッジの Ina Dillard Russell Library に預けることに非協力的であり、図書館の関係者の頭を悩ましていたということであった。レジーナは、翌年1995年の5月8日、99歳で永眠したために、以後、オコナーの伝記的資料を得るのがますます困難になったようである。

筆者が、この「オコナー没後30年祭」で初めて会った著名なオコナー研究者たちに再会できたのは、翌年の1995年に開催されたオコナー生誕70年を祝う“Flannery O'Connor and the Christian Mystery”と題された、ユタ州のブリガム・ヤング大学で行われたシンポジウムである。⁵⁾ 筆者は、ある研究発表者の司会を勤めさせてもらったが、前年のパネルで特別待遇を受け、南部ホスピタリティの素晴らしさに感動したという体験があったために、モルモン教が基盤のユタ州とその大学の実に質素な歓迎に、同じ国アメリカにありながらもその大きな差異に驚かされたものである。

しかし、アメリカのオコナー教会の会長 Sura Rath を始めとして、Ralph C. Wood や セッションズなど前年のパネルで知りあうことができた著名な研究者たちと再会を喜び合うことができ、新たに Margaret Whitt、John Desmond、Richard Giannone 等と知り合えた貴重な機会であった。また、ジョージア・カレッジの図書館の関係者である R. Neil Scott とともに再会を喜びあった。スコットは、この後、オコナーの大部の *Reference Guide* を出版した。彼の仕事に多少の協力をすることができ、筆者の名前も Acknowledgements に加えていただくという幸運を得た。⁶⁾ さらに、このシンポジウムで、基調演説をしたサリーにも再会でき、偶然朝食のテーブルで一緒にになり、気



Ina Dillard Russell Library (1994年4月14日筆者撮影)

軽に写真撮影に応じてくれたことは、一番の思い出になった。サリーは、一流のオコナー研究者でありながら、大変に気さくで、話しやすく、いつも穏やかな雰囲気を漂わせていた。彼女の上品な物腰や話し方の美しさは今も忘れることができない。

筆者がオコナー関連のシンポジウムに参加した3度目の機会は、ブリガム・ヤング大でのシンポジウムから4年後の、1999年5月27日から30日まで、ボルチモアの観光地にあるホテルで開催された、第10回 American Literature Association である。⁷⁾ この大会のプログラムの1つにオコナーの Breakfast Session があり、朝8時開始という強行軍ではあったが参加した。そのとき、「オコナー没後30年祭」のときも、パネル・ディスカッションのパネラーとして参加していた Jean Cash がオコナーの伝記を執筆中であったことから“A Progress Report”と題した発表をした。その朝食会には、セッションズ、Marshall Bruce Gentry、Sarah Fodor、Robert Brinkmeyer 等も出ていて、筆者は、この人たちと初対面ではなかったこともあり、親しく会話できた。

しかし、伝記を執筆中であったジーン・キャッシュだけは、この3度のオコナー関連学会で初めて言葉を交わした人であったし、その他の著名な学者たちとは違い、好印象を持つことはできなかった。本大会参加者の中では、非常に少数派であったアジア系に属す筆者が、多くの著名なオコナー学者たちと親しげに話しをしていたことを快く思わなかったのか、「これで3度目になります」というようなことを述べた折、「お金さえあれば何度でも来れるからね」というようなことを皮肉な調子で言われた。このときのキャッシュの態度は今でも嫌な思い出として記憶に残っている。

あれから、3年後の2002年に、キャッシュの執筆したオコナーの伝記 *Flannery O'Connor: A Life* が出版された。オコナーの伝記を出す予定であったサリーや、オコナーの母親からは、貴重な情報を提供してもらえることはできなかったのだらうな、と思わせるような内容であった。すなわち、キャッシュの書いたこの伝記には、筆者が知らなくて驚かされた事実や、オコナーのファンである多くの読者や研究者を感動させてくれるような情報はほとんど入ってはいなかった。オコナーの生きた軌跡をより詳しく述べていて、興味深い伝記的事実を読者に提供してくれているのは、む



Sally Fitzgeraldと筆者（1995年11月13日ユタ州にて）

しろ日本のオコナー研究者である野口肇の6つの研究書においてである。

しかし、キャッシュが実に数多くのインタビューをこなし、数多くの未出版の手紙を入手して、読者に紹介していることは貴重であるといえよう。現在手に入るオコナーの伝記はこの1冊のみであるので、本論文で、その内容について順を追って紹介したい。

1) Introduction: The Woman

序章でもあるこの章で、キャッシュは“O'Connor was neither mysterious nor strange: She was an intelligent, good-humored artist, ….”⁸⁾と述べている。オコナーが「神秘的でも異様でもなく、知的でユーモアがある芸術家」と指摘している。しかし、このようなオコナー評は、研究者の間では、良く知られているものであり、改めて述べる必要もないことのように思われる。

2) Savannah, 1925～1938

南部作家であるオコナーの作品の中には、黒人がさまざまな形で登場する。“The Artificial Nigger”という今では差別表現である言葉をタイトルに使っている短編もあることから、彼女が人種差別主義者であったかどうかという論点は良く取り扱われるテーマにもなっている。しかし、彼女が公民権運動の起こる時代の前に、南部で生まれ育ったことを考えると、黒人差別をしていたというよりは、白人と黒人がそれぞれの立場で自然に共生していた環境にあったと言えよう。オコナーがどのような状況下で育ったかは、キャッシュがHugh R. Brownの“Savannah Landmark: Flannery O'Connor's Childhood Home”から借用した“Racially the city was totally segregated; even the Roman Catholic Church had four churches for whites and three for blacks.”(2)という引用に良く表れている。

既に指摘したように、キャッシュの自伝の特徴としては、大変な数のインタビューを遂行した点にある。キャッシュは自伝の執筆に10年かかったと言っているが、彼女の膨大な数のインタビューについては評価したい。サバンナでオコナー一家の近所に住んでいたという Elizabeth Maguire Johnson によれば、オコナーの母親が一人娘に過保護であり、“making her eat all her vegetables first before she could eat anything [else] on her plate.” (12) と食事のときも、娘を管理していたことは興味深い。

3) Milledgeville, 1938～1942

キャッシュは、この時期のオコナーについて “already a unique girl whose particular qualities and interest would sustain her through her high school and college years.” (30) と述べ、オコナーがこの頃すでに異彩を放っていたことを指摘している。

4) Milledgeville, 1942～1945

オコナーが、作品の中で、自己中心的に振舞ったり、極端に世俗的であったり、あからさまに人種差別をする登場人物に厳しい制裁を与えることから、彼女が生真面目でユーモアのセンスもなく人目を避けて生きていたような印象を与えることも少なくない。そのため、キャッシュが1990年の夏に、オコナーの大学時代の級友たちに手紙によるアンケートを送って得た情報は、オコナーが決してそのような人物ではなく、むしろユーモアにあふれた場を楽しくさせるようなセンスがあったことがわかる。級友の一人は、オコナーについて “intelligent, serious, reserved, yet witty,” と語っている。オコナーの親友であった Betty Boyd Love は、オコナーの専門機関誌 *Flannery O'Connor Bulletin* にも投稿しているが、キャッシュは、ラブが、オコナーのユーモアのセンスについて “I never knew Flannery to be without the same dry, whimsical humor that she later developed to such a fine degree and into such a fine art.” (55) と記しているのを紹介している。キャッシュがさらに、この記事のマニュスクリプトから抜粋した下記の箇所はラブとオコナーの友情の大きさを読者に知らせる点で貴重である。

Flannery O'Connor [as a] quite unusual individual, and I was fond of her. She knew who she was, and what she was, and was neither over-pleased nor disturbed by either... She drawled, she had a wry twist of humor, and she was a delightful company. (56)

5) Iowa, 1945～1948

オコナーが、アイオワ大で Paul Engle に教えを受けたことは良く知られている。初対面のとき、オコナーの南部なまりが強すぎてエングルには彼女の会話が理解できなかったという逸話も有名である。そのときの状況がワシントン・ポストで紹介されたときの記事をキャッシュが紹介している。

...I understood nothing, not one syllable. As far as I knew, she was saying “Aaaraa araaaaarah.” My God, I thought to myself, this is a retarded young girl.

[...] Finally, I said, excuse me, my name is Paul Engle. I gave her a pad—believe me, this is true—and said would you please write down what you’re telling me... She didn’t say “I want to be a writer.” She said “I am a writer.” (80)

ここには、二人の初対面のときの様子がおもしろおかしく紹介されているが、オコナーが大学を終えたばかりの頃から自分を「作家」だと名乗ったという事実に、彼女の自信と決意がうかがえる。

しかし、オコナーは、作家への道をひたすら目指していただけないという一面もあったようだ。キャッシュは、“Flannery O'Connor did form, in her last year at Iowa, a close friendship with Robie Macauley, who…admitted that he ‘used to date’ O'Connor at Iowa.” (98) と、オコナーが若い女子学生の一人として普通に男友達とデートをしたこともあると述べている。この逸話は、彼女の性的嗜好について取沙汰されることもあり、不快な気持ちに襲われることがある読者にとっては、心温まる指摘である。オコナーのこの恋は、Macauley が別の女性と結婚することで失恋に終わるのであるが、キャッシュによれば、以後も二人の友情は続いたということである。(101)

6) Yaddo, New York City, and Connecticut, 1948～1950

オコナーは1948年の夏にヤドーに来て、以後長編 *Wise Blood* の執筆に専念する。翌年の2月に Robert Lowell が、オコナーに、後に生涯の友となり、編集者にもなった Robert Giroux を紹介したことが記されている。(121) さらに、彼は、同じ月の後半には、フィッツジェラルド夫妻にもオコナーを紹介している。キャッシュは、Beth Dawkins Bassettが*Emory Magazine* 58.4 (1982年4月号、17-23) に掲載した、サリーのオコナーへの第一印象を述べた記事を掲載している。

She was 24 years old, a slender, fine-boned girl about 5 feet 5 inches tall… with sandy blonde hair… She was attractive, but not a beauty, but she had astonishing blue eyes which everyone noticed quite shining blue eyes, large and very attentive; a gaze so penetrating I always wondered how anyone dare to speak out openly around her[…] but the first impression was one of an appealing, likeable young girl. (124)

作家になって有名になった頃には、すでに不治の病に冒されていて、分厚い眼鏡と薬による副作用でむくんだ顔のオコナーが松葉杖で立っている姿を想像しがちな読者にとっては、きらきら輝く青い瞳が印象的な若いオコナーの生き生きとした姿は新鮮である。そして、この初対面の日から3年後の1948年には、夫妻はオコナーをコネティカットに新築した家に招待し、共に1年あまり暮らすことになる。しかし、翌年のクリスマスの頃にはオコナーは、病に倒れて、1950年には、父親と同じ病気であることが判明する。

7) Return to Milledgeville and a Pivotal Decision

作家としても道半ばであったオコナーは、こうして、再び故郷に戻ることを余儀なくさせられる。キャッシュは、Alta L. Haynes がオコナーと彼女の母親と交わした未出版の手紙やメモ（ミレッジブル、オコナーの母校の図書館 Ina Dillard Russell Library 所蔵）を掲載している。オコナーは、彼女に「病のために結婚はできないだろう」と打ち明けたという。(138) 病気のために、女性として幸せな結婚をあきらめたという事実にもかかわらず、オコナーが Maryat Lee を初めとして多くの女友達と友情をはぐくんでいたことから、「レズビアン」のレッテルを貼られることも少ない。そのため、キャッシュがこの章でサリーの論文を借用して、オコナーが男性との失恋を繰り返していたことが確認されることは (136)、オコナーについての判断が過ちであったことがわかり、

また、オコナーが一人の女性としてかなわぬ恋に苦しんでいたことが知れて興味深い。

8) Regina and Flannery

オコナーの病状が一段落すると、母と娘はアンダルシアの農場に引っ越す。二人は、したがって1951年から、オコナーが永眠する1964年まで、ここで13年間暮らすことになる。キャッシュはRichard Gilman が1960年に農場を訪れたときの、レジーナへの第一印象について、“The writer’s mother [...] struck me as an amazingly competent woman, of a pioneer-like stamina and courage.” (146) と述べているのを紹介している。現存しているレジーナが若いときの写真は、小柄で細面の南部の淑女という感じの女性である。夫が若くして死に、娘が病気になってしまっただけで、全てが自分の手にかかってくることになり、精神的にも身体的にも遅く生きていかざるをえなかったのであろう。レジーナが農場でどのように暮らしていたかは、オコナーの作品に繰り返し登場する様々な中年の女性像の姿から想像できる。

キャッシュのレジーナに対するコメント、“Regina O’Connor saw little value in any activity—her daughter’s writing included—that did not bring in money.” (161) という記述に、レジーナの中にオコナーの短編に良く登場する、物質主義的な中年女性の面影を垣間見ることができる。先に言及したギルマンが、オコナーの二作目の長編 *The Violent Bear It Away* の出版の後で、農場を訪れたときの描写にも、レジーナが金銭に対する関心が強かったことが示されている：“And then I added that Flannery’s reputation was more and more secure and that was the important thing. ‘Important thing!’ she snorted, ‘reputations don’t buy groceries.’” (162) 少し信じられないような会話ではあるが、実際にレジーナが言ったものであるならば、このように娘の仕事を少しも理解できないような母親との二人暮らしで、オコナーがどのような気持ちで日々暮らしていたかを考えると心が痛む。

1995年にレジーナは他界するが、このとき、レジーナが節約家であったことから、オコナーと暮らした家も全く手入れがされておらず “deplorable condition” (162) であったという。また、筆者も参加した、レジーナの死の前年に開催された「オコナー没後30年祭」のとき、彼女が秘密主義で、誰とも会いたがらないと聞いたが、キャッシュによれば、そのとき学者やファンがオコナーの家の周りをうろつくことを恐れて、節約家にもかかわらずガードマンを雇って見張りをさせていたとの事実が驚かされた。(162)

しかし、このような terrible mother とでも言えるレジーナに対しても、娘のオコナーが母親の愛に感謝していたらしいことは、“she was deeply grateful to her mother for her love and care through the years.” (168) という、Father McCown が Tom Gossett に出した未出版の手紙に書かれている。キャッシュの “she had no choice but to accept her mother for both her good and bad qualities.” (172) というコメントに、オコナーが母親に対してどのような感情を持っていたかがうかがえる。しかし、アンダルシア農場という限られた環境で母親と二人暮らしであったにもかかわらず、オコナーが次々に魅力的な作品を書き上げていくことができたのは、彼女の生まれながらの作家としての才能にもよるものだが、母親の特徴ある性格が娘の作品の中で重要な題材を提供していたであろうことも確かである。

9) Milledgeville~Early Friendships

キャッシュによれば、オコナーは、Rosa Lee Walston を始めとして、母校の教員たちとの交流を楽しんでいたようである。母校ではないが、ジョージアの別の学校の教師をしていた Benjamin

Griffith も当時のオコナーの友人の一人であった。1989年に、グリフィスは、オコナーの全集についての書評を『スワニー・レビュー』に掲載した。ここには、学者であり、オコナーの友人であるグリフィスならではの、彼女への作家としての才能についての高い評価が記されている。

Wherein lies O'Connor's uniqueness? I think it is in her compelling distinctive voice, pervading stories that are both spiritually profound and excruciatingly funny...her works are deeply religious, and the humor makes them deceptively so for readers.” (181)

オコナーは、当時の友人であった James McCown 神父から、Tom and Louise Gossett 夫妻に紹介された。このようにしてオコナーの友人の輪が広がっていくのであるが、この夫婦が客人としてオコナーとレジーナの住むアンダルシア農場に呼んだ、最も有名な作家としては、Katherine Ann Porter が挙げられる。ゴセット夫婦はこのときの様子を写真に収めており、1958年に撮られた、客人として南部の淑女らしく正装したポーターと、薬の副作用でむくんだ顔をして松葉杖をつきながらも、笑顔で彼女を迎え入れるオコナーの写真が、この伝記に収められている写真の中でも最も印象的である。

このようにオコナーは、難病と闘いながら執筆活動が続けていただけではなく、母親と自分という閉鎖的な世界にとどまらずに、多くの人たちとの交流を楽しんで、世界を広げていたのである。

10) Later Friendships

この時期のオコナーの友人であり、先輩作家として、アドバイザーでもあった Caroline Gordon は、Allen Tate を夫に持つ有能な女性であった。オコナーは、永眠するまでずっと、自分の作品を出版社に送る前に彼女に送り、読んでもらっていたようである。Gordon は、作家としてのオコナーを “the most talented-and the most professional” (209) と高く評価している。

ゴードンの他にも Brainard and Frances Cheney 夫妻、夫妻の紹介で、Ashley Brown や Thomas Stritch とも友情を深めた。1956年と1957年には、Elizabeth Hester と Maryat Lee と知り合い、親友といえるような絆で結ばれた。特に、ヘスターとは、1955年7月に、アトランタに住むオコナーの一ファンとしての彼女がオコナーに手紙を書き、それに返事を書いたことから始まった文通が最後まで続いた。キャッシュによれば、オコナーは、ヘスターに約150通にも及ぶ手紙を書いて送ったという。(219) 本人の希望でサリー・フィッツジェラルドが編纂したオコナーの書簡集には、実名は伏せられ、“A” として掲載されている。彼女は、1998年のクリスマスの後、75歳のときピストル自殺をして、以後、新聞にヘスターが“A”であったことが公表された。⁹⁾ そのときの記事によれば、ヘスターは Iris Murdoch と文通していたという。

オコナーが永眠したのは1964年の8月3日であるが、ヘスターには、7月25日にも病床から手紙を書いていたことから、¹⁰⁾ オコナーが彼女を友人として大切に思っていたであろうことがうかがえる。ヘスターと同じようにオコナーの大切なペンパルであった、リーに宛てた7月28日付の手紙がオコナーの書いた最後の手紙であった。キャッシュによれば、レジーナが、オコナーの死後に彼女のベッド脇のテーブルに置いてあったものを発見したそうである。(236)

11) Last Friendships

キャッシュによれば、オコナーは、Cecil Dawkins への未出版の手紙の中で、自分の最良の友は

執筆活動を通じて知り合った人たちだと述べているという。この中で、大学教授としては、Ted Spivey, William Sessions そして Robert Drake がいる。作家としては、このドーキンズに加えて、John Hawkes、Alfred Corn がいる。筆者はドーキンズと、1994年に開催された「オコナー没後30年祭」に参加したとき、初めてお会いした。彼女とは、初対面であったが、大変気さくな人で、筆者のような名もない研究者に対しても楽しく話しをしてくれた。彼女とオコナーは、同じカトリック教の信者であることもあって、友情を深めたようである。

『スワニー・レビュー』（1962年夏号：395-407）で“Flannery O’Connor’s Devil”という論文を掲載したホークスは、オコナーと同じ年に生まれ、1998年に他界した。キャッシュによれば、ホークスはメルヴィルの孫娘からオコナーの作品を読むように薦められ、読後すぐにオコナーの作家としての才能に感銘したようである。（244）

既に言及した3名の大学研究者たちは、オコナーの作品世界に魅了され、オコナーと会うことを希望した。スパイヴィーは、特にオコナーの同時代作家、Carson McCullers の作品に対するオコナーの嫌悪の原因は何なのだろうと関心を持ったらしい。そして、おそらく、オコナーがマッカーズに対してライバル意識があり、自分は実現できなかった南部からの脱出を成し遂げていることをうらやましく思ったのではないかと考えたという。（251）

コロンビア大で修士をとり（後に博士）、ジョージアにある大学で教鞭を執っていたセッションズは、オコナーの“A Good Man Is Hard to Find”について、カトリック教系の雑誌に書評を書いた。その書評にオコナーは関心を抱き、セッションズと文通して、彼をアンダルシア農場へ招待したようである。二人が初めて会ったのは1956年のことである。セッションズがギリシアを訪れたとき、その地からキリストのアイコンが描かれた絵葉書を出した。このときのアイコンがオコナーの“Parker’s Back”でパーカーが背中に彫ったキリストの顔の題材となったようである。1964年の「オコナー没後30年祭」で、セッションズに会ったとき、この絵葉書と同じものを参加者に見せてくれた。

このギリシアの地で、セッションズは1961年の8月に結婚することになる若いギリシアの女性、Jennyと会う。翌年の1962年に長男が誕生したとき、二人はレジーナを名付け親として選んだことから、セッションズ夫妻とオコナー母娘が親戚のように親しい関係にあったことがうかがえる。セッションズがオコナーに最後に会ったのは、1964年の6月、オコナーを病院に見舞ったときである。そのときの印象をセッションズは“*That peculiar humor of hers, more in her piercing eyes than in her voice, charged and volleyed and embraced as always.*”（256）と語っている。病床にあり、外見は見る影もないほど衰えているのにもかかわらず、見舞い客には冗談を言って迎えていたオコナーの姿が想像でき、読者の心を打つ。

オコナーの書簡集で“A”とされているヘスターは、自殺したとき、彼女の未出版の手紙の全てをセッションズに寄贈し、ヘスターの甥がセッションズをヘスターに関する文学的執行者として任命したようである。（256）セッションズは、大変に社交的であり、誰とでも親しく会話を楽しむというタイプの学者である。筆者は、セッションズと既に言及した3つの国際学会で会って話しをしたこともあって、2000年の10月上旬に、彼が上智大学のピーター・ミルワード神父が計画したシンポジウムに招かれて来日したときも、連絡を受けて会いに行った。休日には、セッションズ夫妻を鎌倉見物に案内したところ、大変喜ばれた。

オコナーのこのような、学者や作家たちとの交流が彼女の人生や作家生活を豊かにしていたことをキャッシュは次のように述べている。

The friendships, then, that O’Connor made with aspiring writers and intellectuals during the late 1950s and early 1960s enriched both her personal life and her writing. (258)



William and Jenny Sessions夫妻と筆者（2000年10月8日鎌倉にて）

また、ドレークによる、サリー・フィッツジェラルドがかつて、オコナーを“lived for the mail”と語っていたという逸話は、まさにオコナーの後半の人生を的確に表している言葉であると思う。（258）

12) Lectures and Travel outside Milledgeville, 1955～1959

オコナーは、1954年から1963年までに講演や朗読会を60回近くも行っていたという。特に“The Catholic Novelist in the Protestant South”¹¹⁾と題した講演を気に入っていたらしく15回は繰り返し行っていたようだ。筆者がオコナーのユーモアに満ちた性格を表しているようで、最も好きな彼女の手紙の一節は、友人のリーに宛てた1958年の手紙の中の、“mainly because the element of ham in me seeks release. I have a secret desire to rival Charles Dickens upon the stage”（HB265）と書かれた、彼女が朗読会を好む理由を述べている箇所である。

13) Lectures, 1960～1963

オコナーは、聴衆の前に出ることが非常に快適に感じたらしく、1962年には、なんと11回も朗読会や講演会を引き受けたようであり、11月には、ルイジアナまで行った。ニューオーリンズの大学で講演をしたとき、オコナーと同様に、南部のカトリック作家である Walker Percy とその家族に会った。オコナーは、このときの印象を“I liked them very much”（HB 5）と述べている。

14) Reviews, 1956～1964

オコナーはこの時期、教区の雑誌、*The Georgia Bulletin* と *The Southern Cross* にたくさんの

書評を載せている。そして、1956年から1960の間に、オコナーは16ものカトリック教に関連する作品の書評をしている。(302) オコナーは、1959年の春から永眠するまでずっと、カトリック教の神学者である Peirre Teilhard de Chardin に魅了されて、彼の3つの作品を書評した。オコナーの短編のタイトル“Everything That Rises Must Converge”は、彼の記した言葉である。

15) Illness, Death, and Legacy

1964年8月3日の午前12時40分、Baldwin County Hospital でオコナーは、紅斑性狼瘡がもたらした腎臓の疾患のために永眠する。既に述べたように、レジーナが死の床の脇のテーブルに友人リー宛の手紙（7月28日付け）を発見した。この手紙は書簡集の一番最後に掲載されているが、その内容は、ニューヨーク住まいのリーが、卑猥なはずら電話を受けたことをあれこれ心配して「警察に通報したほうがいい」などと記しているものである。キャッシュは、この最後の手紙は、死期が迫っている人が書いたものとはとても思えず、しかし、このことが大変にオコナーらしくて、彼女の“heroic lack of self-concern”が、長い間病と上手に付き合うことができた理由であると述べている。(317)

『ニューヨークタイムズ』は、翌日である8月4日に、オコナーについて「最も前途有望な作家の一人」と記して、死亡記事を書いた。オコナーは、死の直前まで、3つ目の長編小説にしようとして“Why Do the Heathen Rage?”を書いていた。キャッシュも、もしもオコナーが39歳の若さで夭折しなければ彼女の人生はどのようなものになっていただろうと記している。Louise Westling が、オコナーが生きて書き続けていれば、彼女の描く世界は、“a more feminist direction”をとっていただろうと示唆しているという。(318) 筆者もオコナーは、作家として有名になるずっと以前、公民権運動や女性解放運動が盛んになるずっと以前から、男性には頼ることのない、一人の女性の生き方のようなものを作品で模索していたと確信していることから、¹²⁾ ウェスリングの示唆を支持したい。

以上、キャッシュによるオコナーの最初の伝記の内容を簡単に紹介しながら、オコナーの生涯を振り返ってみた。一般に、オコナーは、作品に描く世界が特異なことから、南部の片田舎で母親と二人暮らしをしていて、隠遁生活のような日々から、宗教色の強い作品を書き残しているマイナーな作家として見られがちである。しかし、このキャッシュの自伝を読んで、オコナーが、39年という短い生涯を病氣と闘いながらも、多くの人と交流し、決して悲観的になることはない強靱な精神力を持ちながら、たくさんの読者を魅了する世界を描いたことを確信できた。

キャッシュが10年もの歳月をかけて執筆したオコナーの伝記は数多くのインタビューや、オコナーに関連する文献を読み終えて書かれたという点で注目に値する。しかし、伝記をほぼ完成して他界したサリー・フィッツジェラルドや、オコナーやレジーナと直接交流しており、今も元気に執筆活動が続けているセッションズ等が保管しているに違いない、より鮮明な情報に基づいた、また別のオコナーの伝記の出版が待たれる。

註

- 1) オコナーの初期作品については、拙論「フラナリー・オコナーの初期作品再読」『東京成徳短期大学紀要』第38号（2005年3月）：81-93頁を参照されたい。
- 2) オコナー研究の第一人者（6冊の研究書を出している）である野口肇も、その第1冊目のオコナー研究書『フラナリー・オコナー論考』（文化書房博文社、1985年）で「私の知る限り、今までオコナーの伝記と銘打ったものは出版されていない…第3回フラナリー・オコナーシンポジウム（1984年）…の案内書による

とサリー・フィッツジェラルドが“the author of the forthcoming biography of Flannery O'Connor”と紹介されているから、近々オコナーの‘biography’が出るのであろう。楽しみである」(7頁)と、20年も前に述べているが、以後も伝記は出版されていなかった。

- 3) この祝祭については、拙論「フラナリー・オコナー没後30年祭」『英語青年』1994年10月号(第140巻第7号、研究社、22-23頁)を参照。
- 4) サリーの死については、アメリカのオコナー協会であるFlannery O'Connor Societyの機関誌*Cheers!*の“Friend and editor of Flannery O'Connor dies at 83”(by Jennifer Copeland)という記事を参照。2000年の春・夏号(Vol. 8, No. 1)。
- 5) この記念シンポジウムについては、拙論「アメリカと日本におけるフラナリー・オコナー研究——The *Flannery O'Connor Bulletin*を中心に」『東京成徳短期大学紀要』第30号(1997年3月): 73-82頁を参照されたい。
- 6) R. Neil Scott, *Flannery O'Connor: An Annotated Reference Guide to Criticism* (Milledgeville, Georgia: Timberlane Books, 2002): xii
- 7) この年次大会については、拙論「AALA年次大会に参加して」『英語青年』1999年12月号(第145巻第7号、研究社、38頁)を参照。
- 8) Jean W. Cash, *Flannery O'Connor: A Life* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 2002), xvii. 以下、この伝記からの引用は文中の括弧内にその頁数を記す。
- 9) Betty Hesterの死については、*Cheers!*の“O'Connor ‘mystery correspondent’ dies”という記事を参照。1998-99年の秋・冬号(Vol. 6, No. 2)。
- 10) Flannery O'Connor, *Letters of Flannery O'Connor: The Habit of Being*, selected and ed. Sally Fitzgerald (New York: Farrar, Straus, and Giroux, 1980): 594. 以下、この書簡集からの引用は、HBと省略し、引用は文中の括弧内にその頁数を記す。
- 11) Flannery O'Connor, *Mystery and Manners*, selected and ed. Sally and Robert Fitzgerald (New York: Farrar, Straus, and Giroux, 1984): 191-209.
- 12) 上記、注1)にある拙論で、オコナーの初期作品“The Crop”「収穫」が、女性の生き方を論じたフェミニズム運動のさきがけとも言える世界を描いていることを論じた。